○待々し日永となれど田舎かな

出　句稿消息（文化10）

注　中七以下「日永と成れど田舎哉」。文政版発句集、座五「田舎哉」。七番日記（文化13・1）、中七以下「日永となれば田舎哉」。

春風やとある垣根の赤草履

出　八番日記（文政3・2）

宿引に女も出たりはるの風

出　八番日記（文政3・2）

注　座五「春の風」。

老ぬれば日の永いにも涙かな

出　八番日記（文政3・2）・浅黄空・自筆句集

注　風間本八番日記、中七「日の長へにも」。梅塵本八番日記・浅黄空、中七「日の長いにも」。自筆句集、中七以下「日〔の〕永いのも涙哉」。七番日記（文化13・2）、上五「老の身は」。文政句帳、上五「としよれば」。

闇がりの牛を曳出す日永かな

出　八番日記（文政3・3）

注　座五「日永哉」。

○春風や牛にひかれて善光寺

出　七番日記（文化8・2）・文化三―八年句帳写・希杖本句集

注　七番日記、中七「牛に引かれて」。句帳写、前書「二月十五日より開帳」、中七「牛に引かれて」。希杖本句集、中七「牛に曳れて」。

○はるの風おまんが布の形りにふく

出　志多良（文化10）・句稿消息・浅黄空

注　志多良・句稿消息、前書「高い山から谷そこみれば」（俗謡に「高い山から谷底見れば おまんかわいや布さらす」）、座五「なりに吹」。浅黄空、前書「高い山から谷底見れば」、座五「形りニ吹」。文政版発句集、座五「形りに吸」。

○狗が鼠とるなりはるの風

出　八番日記（文政3・10）

注　中七「鼠とる也」。八番日記（文政4・2）、中七以下「鼠とる也春の雨」。

㊟ 我春集、中七「大欠ビスル」。

袖たけの垣の嬉しやはるの雨

出 板本発句題叢（文政3）

㊟ 中七「垣のうれしや」。

春雨や喰れ残りの鴨が啼

出 七番日記（文化10・1）・志多良・句稿消息

㊟ 七番日記・志多良・句稿消息、座五「鴨が鳴」。浅黄空・自筆句集、座五「鴨の声」。

春甫新宅賀

○安堵して鼠も寝るよはるの雨

出 文政版発句集初出

㊟ 座五「春の雨」。

婚　礼

○春雨や相に相生の松の声

出 浅黄空・自筆句集

㊟ 浅黄空、前書「新婚賀」、中七「あひニ相生の」。自筆句集、前書ナシ。希杖本句集、前書ナシ。中七以下「あひに相生の松の色」。

○春雨や鼠のなめる角田川

出 句稿消息（文化10）

㊟ 希杖本句集、上五「長閑さや」。

○穴蔵の中でものいふ春の雨

出 七番日記（文化10・3）・志多良・句稿消息・浅黄空

㊟ 七番日記・志多良・句稿消息、中七「中で物いふ」。浅黄空、上五「穴〔蔵〕の」。

○負弓の藪にかゝりてはるの雨

出 七番日記（文化11・春）・句稿消息

㊟ 七番日記、前書「飼犬に手を喰はるゝ」。上五「負弓が」、座五「春の雨」句稿消息・文政版発句集、前書ナシ。座五「春の雨」。

鳩いけんして曰

○梟よつらくせ直せはるの雨

出 七番日記（文化12・1）・斗囿あて書簡（文化12・2・23付）・春耕筆録『歌仙』（一茶・成布・春耕三吟歌仙＝未満、文化12・4）、句稿消息

㊟ 七番日記（12・1）、前書「鳩いけんしていはく」、中七以下「面癖直せ春の雨」。書簡、前書「鳩いけんしていはく」。歌仙、「ふくろふよつらくせ直せ春の雨」。句稿消息、前書ナシ、中七以下「面くせ直せ春の雨」。七番日記（文化11・11）、前書ナシ、「梟も面癖直せ春の雨」。浅黄空、前書ナシ、「梟もつらくせ直せ春の雨」。自筆句集、前書ナシ、「梟もつらくせ直せ春の雨」。文政版発句集、前書「鳩いけんしていはく」、座五「春の雨」。

水江春色

○すつぽんも時や作らんはるの月

出 七番日記（文政1・3）・李園あて書簡（文政2・2・15付）・おらが春・浅黄空

㊟ 七番日記、前書ナシ、上五「スッポンも」、座五「春の月」。書簡・おらが春・文政版発句集、座五「春の月」。浅黄空、前書「大沼春色」、座五「春の月」。

○ついそこの二文渡しや春の月

出 七番日記（文化9・2）・株番

りけり」。

○我蒔た種をやれ〳〵けさの露

㊀ 七番日記（文化10・1）・志多良

㊟ 七番日記、上五「我蒔」。句稿消息、中七「種もやれ〳〵」。

○かまくらやむかしどなたの千代椿

㊀ 文政版発句集初出

㊟ 中七「昔どなたの」。七番日記（文化10・2）、中七「実朝どのゝ」。七番日記（文化10・3）、中七「どなたが春の」。

○菜の花や霞の裾に少しづゝ

㊀ 七番日記（文化11・3）・句稿消息・浅黄空・自筆句集

㊟ 七番日記、中七以下「かすみの裾に少ヅゝ」。句稿消息、中七以下「かすみの裾に少づゝ」。浅黄空、中七以下「霞の裾ニ少しづゝ」。自筆句集、中七以下「霞の裾に少づゝ」。

陽炎やそばやが前の箸の山

㊀ 文政句帳（6・5、7・1）・梅塵抄録連句集（一茶・梅塵両吟歌仙＝文政7・2、一茶・梅塵・蘭腸・幻一表六句＝文政7・2）

㊟ 一茶・梅塵両吟歌仙をのぞき、中七「そば屋が前の」。文政版発句集、中七「蕎麦屋が前の」。

小金原

呼あふて長閑に暮らす野馬哉

㊀ 八番日記（文政3・3）・浅黄空・自筆句集

㊟ 八番日記・自筆句集、前書ナシ。中七「長閑に暮す」。浅黄空、上五「呼合ふて」。

○かるた程門の菜の花咲にけり

㊀ 七番日記（文化10・1）・句稿消息・浅黄空・自筆句集

㊟ 七番日記、中七「門のなの花」。浅黄空、中七「門の菜の〔花〕」。自筆句集、上五「かるた程」。志多良、中七「門の菜畠も」。

○大菜小菜喰ふそばから花咲ぬ

㊀ 七番日記（11・3）・斗囿あて書簡（文化11・3）・句稿消息

㊟ 七番日記・文政版発句集、中七以下「くらふ側から花さきぬ」。

○春の日や暮ても見ゆる東山

㊀ 文化句帳（2・1）

三助がはつせ詣やはるの雨

㊀ 八番日記（文政3・1）

○傘さして箱根越すなり春の雨

㊀ 七番日記（文政1・3、1・12＝重出）・浅黄空

㊟ 七番日記（1・12）、中七「箱根越也」。浅黄空、中七「箱根越す也」。

朝市に大肌ぬぎや春の雨

㊀ 八番日記（文政2・1）

㊟ 風間本・梅塵本とも、上五「朝市の」。

掃留の赤元結やはるの雨

㊀ 八番日記（文政2・2）

㊟ 上五「掃溜の」、座五「春の雨」。

餅買に箱提灯や春の雨

㊀ 我春集（文化8）・九日集（文政8）

春雨に大欠する美人かな

㊀ 七番日記（文化8・1）・我春集・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加・近世発句類題集

㊟ 上五・中七「門のてふ子が這へはとび」。浅黄空、上五・中七「庭のてふ子が這へばとび」。自筆句集、上五・中七「庭の蝶子が這ばとび」。梅塵抄録本連句集（一茶・素外両吟歌仙＝文政7・2）、「庭の蝶子が這ひば飛はひばとぶ」。

○小男鹿や蝶をふるつてまた眠る

㊥ 文政句帳（7・4）・発句鈔追加

㊟ 文政句帳、「さをしかや蝶を振て又眠」。発句鈔追加・文政版発句集、「さを塵や蝶をふるつて又眠る」。自筆句集、「さをしかや蝶をふるつて又眠る」。

気の毒やおれをしたふて来る小蝶

㊥ 八番日記（文政3・2）

㊟ 中七以下「おれをしとふて来る小てふ」。梅塵本八番日記（文政3）、上五「何の気や」。

てふといふ娘山路の案内しけるに、俄雨はら〳〵とふりければ

○木の陰やてふとやどるも他生の縁

㊥ 文政句帳（8・2）

㊟ 前書「小娘の山路の案内しける、一むら雨のさと降りければ」。中七「蝶と休むも」。文政版発句集、前書「はら〳〵ふりければ」（末尾）。

橋本町上人

○陽炎や歩行ながらの御法談

㊥ 七番日記（文政1・4、1・12＝重出）・八番日記（文政2・1）・浅黄空。

㊟ 七番日記（1・4）、前書ナシ。七番日記（1・12）、前書「題橋元町聖人」。八番日記、前書ナシ。浅黄空、前書「橋本町住僧」。文政版発句集、前書「橋本町上人」。

○かげろふや臼の中からま一筋

㊥ 七番日記（文化10・1）・志多良・句稿消息

㊟ 七番日記、上五「陽炎や」、座五「ま一すじ」。志多良・句稿消息、上五「陽炎や」。

長閑さや垣間を覗く山の僧

㊥ 嘉永版発句集初出

陽炎や子をかくされし親の顔

㊥ 嘉永版発句集初出

㊟ 文化句帳（3・1）、中七以下「子をなくされし鳥の顔」。

長閑さや浅間けぶりの昼の月

㊥ 八番日記（文政2・1）・発句鈔追加

㊟ 八番日記（風間本・梅塵本とも）、中七「浅間のけぶり」。発句鈔追加、上五・中七「のどかさや浅間の煙り」。

陽炎や手に下駄はいて善光寺

㊥ 八番日記（文政2・4）・希杖本句集

㊟ 梅塵本八番日記、前書「居去」。

○凧あげてゆるりとしたる小村哉

㊥ 七番日記（文化13・3）・句稿消息・某人あて書簡（文化14・3・3）

㊟ 七番日記・句稿消息・書簡・文政版発句集とも、上五「凧上て」。

○美しき凧あがりけり乞食小屋

㊥ 稿本発句題叢（文政3）

㊟ 上五・中七「うつくしき凧上りけり」。文政版発句集、中七「凧上

㊟ 上五「さをしかに」、座五「角の迹」。志多良・句稿消息・稿本発句題叢・浅黄空、上五「さをしかよ」、座五「角の迹」。

小男鹿の落した角を枕かな

㊟ 梅塵本八番日記（文政3）

㊟ 上五「さをしかの」。風間本八番日記（文政3・3）、「大鹿のおとした角を枕哉」。

角おちて恥しげなり山の鹿

㊟ 八番日記（文政3・3）

㊟ 中七「はづかしげ也」。

奉納

○おんひら〳〵蝶も金比羅参りかな

㊟ 文政句帳（6・4、7・5）・自筆句集・浅黄空

㊟ 文政句帳（6・4）、前書ナシ。上五「ヲンヒラ〳〵」、座五「参り哉」。文政句帳（7・5）、前書ナシ。中七以下「蝶も金ぴら参り哉」。自筆句集、前書ナシ。中七以下「蝶も金ぴら参哉」。浅黄空、前書ナシ。中七以下「蝶も金比羅参り哉」。文政版発句集、前書「奉納」。中七以下「蝶も金比羅参り哉」。

○蝶飛や此世に望みないやうに

㊟ 文化三―八年句日記写（文化6）・稿本発句題叢・希杖本句集

㊟ 発句題叢、上五・中七「蝶とぶ〔や〕此世〔に〕望ミ」。文化三―八年句日記写（文化6）、上五・中七「蝶とぶや 此世の 望み」。文政版発句集、上五・中七「てふ飛や此世の望ミ」。

むつましや生れ替らば野辺の蝶

㊟ 七番日記（文化8・1）・我春集・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

㊟ 七番日記、中七以下「生れかはらばのべの蝶」。発句題叢、座五野辺のてふ」。発句鈔追加、中七以下「生れかはらば野辺の蝶」。

大猫の尻尾でなぶる小蝶かな

㊟ 八番日記（文政2・1）・おらが春

㊟ 八番日記・おらが春、座五「小蝶哉」。七番日記（文政1・9）、中七以下「尻尾でじやらす小てふ蝶」。

蝶寝るや草ひきむしる尻の先

㊟ 嘉永版発句集初出

㊟ 風間本八番日記（文政3・2）、全集本・資文堂版とも、中七以下「草引むしる尾の松」。梅塵本八番日記（文政3）、上五・中七「てふ飛や草引むしる」。

○葎からあんな蝴蝶の生れけり

㊟ おらが春・自筆句集

㊟ 八番日記（文政2・2）、中七「あん〔な〕小蝶が」。李園あて書簡（文政2・2・15付）・浅黄空・文政版発句集、中七「あんな小蝶が」。八番日記（文政2・3）、上五・中七「塵塚にあんな小蝶が」「芥からあんな小蝶が」（別案）。

○田に畑にてん〳〵舞の小蝶かな

㊟ 句稿消息

㊟ 上五「田に畠に」、座五「小てふ哉」。文政版発句集、座五「小てふ哉」。七番日記（文化11・1、文政1・2）、上五「麦に菜に」。浅黄空、上五「麦ニ菜ニ」、座五「小蝶哉」。自筆句集、「麦に菜にてん〳〵まひの小てふ哉」。

○門の蝶子が這へば飛はへばとぶ

㊟ 文政版発句集初出

「古池やまづ御先へととぶ蛙」。

○いうぜんとして山を見る蛙かな

㊀ 句稿消息・おらが春・浅黄空・自筆句集

㊟ 句稿消息以下文政版発句集を含め、いずれも上五「ゆうぜんと」。

其声もひとつ踊れよ啼蛙

㊀ 八番日記（文政2・3）

㊟ 中七「一つ(を)おどれよ」。梅塵本八番日記（2）、「其声一ッ一ッ(を)おどれよ鳴蛙」。

産さうな腹をかゝへて啼蛙

㊀ 八番日記（文政4・1）

㊟ 産さふ(う)な腹をかゝ(へ)いてなく蛙」。八番日記（9・3）、「産みさうに腹をか〔ゝ〕(へ)いて鳴蛙」。

我庵や蛙初手から老を啼

㊀ 七番日記（文化8・1）・我春集・発句鈔追加

㊟ 七番日記、座五「老を鳴く」。我春集、座五「老を鳴」。発句鈔追加、座五「老をなく」。稿本発句題叢、「我門や蛙初手から老を鳴」。希杖本句集、「我門や蛙初手から老を啼」。

南　都

○朝起の古風を捨ぬ乙鳥かな

㊀ 文政句帳（8・9）

㊟ 座五「乙鳥哉」。

夕乙鳥我には翌日のあてもなし

㊀ 近世発句類題集（文政3）

㊟ 文化句帳（4・2）、「夕燕我には翌のあてはなき」。稿本発句題叢、座五「あてもなき」。発句鈔追加、「夕つばめ我のみ翌のあてもなし」。

○昼めしをたべにおりたる雲雀哉

㊀ 七番日記（文化10・3）・志多良・句稿消息・稿本発句題叢・浅黄空・自筆本句集

㊟ 七番日記・志多良・句稿消息、上五・中七「昼飯をたべに下りたる」。稿本発句題叢、浅黄空、上五・中七「昼飯をたべニおりたる」。

○横乗の馬のつゞくや夕ひばり

㊀ 八番日記（文政2・3）・おらが春

㊟ 八番日記、上五「横のりの」、座五「夕雲雀」。おらが春、座五「夕雲雀」。八番日記（文政2・2）、座五「夕がすみ」。

野大根も花となりけり鳴雲雀

㊀ 稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加

㊟ 発句題叢、中七「花と成けり」。文化句帳（1・3）、中七「花咲にけり」。

○それ虻に世話をやかすな明り窓

㊀ 文政版発句集初出

㊟ 七番日記（文化14・8）、座五「せうじ(しや)窓」。

○神風や虻がをしへる山の道

㊀ 文政句帳（5・3）・文政九、十句帳写・浅黄空・自筆句集

㊟ 文政句帳・自筆句集、中七「虻が教へる」。九・十句帳写、前書「奉納」、中七「虻が教へる」。浅黄空、前書「虻」、中七「虻が教へる」。

小男鹿に手拭かさん角の跡

㊀ 七番日記（文化10・1）

㊀ 文政版発句集初出

㊟ 中七「走り留りや」。七番日記（文化10・3）、中七以下「走り留りや草と空」。

○黒門や下たに(衍)〳〵雉子の声

㊀ 文政版発句集初出

㊟ 中七「下タに〳〵と」。七番日記（文政1・2）、前書「上野」、上五・中七「御通りや下〔に〕〳〵と」。八番日記（文政4・9）、上五・中七「鴛先に下にの声と」。だん袋、前書「東叡山」、上五・中七「鴛さきやしたに〳〵と」。発句鈔追加、前書「東叡山」、上五・中七「鴛先や下に下にと」。

雀子のはやしりにけり隠れやう

㊀ 七番日記（文化9・3）・稿本発句題叢・浅黄空・自筆句集・希杖本句集・発句鈔追加

㊟ 七番日記、座五「かくれ様」。題叢、座五「かくれやう」。浅黄空、座五「隠れ様」。自筆句集・発句鈔追加、中七以下「はや知りにけりかくれやう」。希杖本句集、中七以下「はや知りにけり隠れやう」。

独　座

○おれとしてにらみくらする蛙哉

㊀ 梅塵本八番日記（文政2）・おらが春・浅黄空・自筆句集・李園あて書簡（文政2・2・15付）

㊟ 梅塵本八番日記、中七「白眼くらする」。自筆句集、前書ナシ。風間本八番日記（文政2・2）、中七「かゞみくらする」。

榎まで春めかせたり啼蛙

㊀ 嘉永版発句集初出

㊟ 稿本発句題叢、「榎迄春めかせけりなく蛙」。希杖本句集、上五・中七「榎立春めかせけり」。発句鈔追加、中七以下「春めかしたりなくかはず」。

親分と見えて上座に鳴蛙

㊀ 八番日記（文政2・2）

㊟ 中七「見へて上座に」。

○向〳〵に蛙のいとこはとこかな

㊀ 七番日記（文化10・1）

㊟ 上五「むき〳〵に」。浅黄空・自筆句集、上五「車座に」、座五「はとこ哉」。

○めでたさの煙聳へて啼蛙

㊀ 七番日記（文化12・2）・浅黄空・自筆句集

㊟ 七番日記、上五「目出度の」、座五「なく蛙」。浅黄空、上五「目出度さの」、座五「なく蛙」。自筆句集、上五「〔目〕出たさの」、座五「なく蛙」。文政版発句集、座五「なく蛙」。

○我を見て苦いかほする蛙かな

㊀ 文化句帳（5・1）

㊟ 中七以下「にがひ顔する蛙哉」。

○象がたや桜をたべて鳴蛙

㊀ 稿本発句題叢・希杖本句集

㊟ 発句題叢・希杖本句集、座五「なく蛙」。七番日記（文化1・8）・我春集、上五「象潟や桜を浴てなく蛙」。

○玉川やまづ御先へと飛かはづ

㊀ 自筆句集

㊟ 中七以下「先御さきへととぶ蛙」。七番日記（文化13・1）、「山吹や先御先へととぶ蛙」。浅黄空、前書「深川芭蕉庵の跡拝見して」、

に天地丸赤〳〵とたゞよひ、田中は新に道を作り、溝川ことゞく〳〵く板をわたして、おの〳〵御遊をまつと見えたり。まことに心なき草木も風に伏して、目出度御代をあふぐとも覚へ待る。五百崎や御舟をがん(拝)で帰る雁」。文政版発句集との異同は以下のとおりである。「ほの〴〵」→「ほの〴〵と」。「闇かりき」→「くらかりき」。「川のおもて」→「川の面」。「うかめて」→「うかみて」。「見へたり」→「見えたり」。「めでたき」→「めで度」。「あふぐとぞ」→「あふぐとは」。「覚へ侍る」→「覚え待る」。

善光寺

開帳にあふや雀も親子連

㊥　七番日記（文政1・3）・だん袋・浅黄空

㊟　七番日記、中七以下「逢ふや雀のおや子連」。だん袋、前書「善光寺御堂」、中七以下「逢ふや雀のおや子連」。浅黄空、中七「逢ふや雀も」。

雀子や川の中にて親を呼

㊥　梅塵本八番日記（文政2）

㊟　座五「親を呼ぶ」。風間本八番日記、中七以下「川の中迄親をよぶ」。

○雀の子そこのけ〳〵御馬が通る

㊥　八番日記（文政2・2）・おらが春

㊟　八番日記、中七「そはの(こ)け〳〵」。

○竹にいざ梅にいざとや親すゞめ

㊥　稿本発句題叢・句稿消息・希杖本句集

㊟　発句題叢・句稿消息・文政版発句集、座五「親雀」。七番日記（文化11・3）、「竹に来よ梅に来よとや親雀」。浅黄空・自筆句集、「松にいざ竹にいざとや親雀」。

我と来て遊や親のない雀

㊥　句稿消息・自筆句集

㊟　句稿消息、前書「八才の時」、中七「遊ぶ親の」。自筆句集、中七「遊ぶ親の」。七番日記（文化11・1）、中七「あそぶ親の」。浅黄空、前文「親のない子ハ肩身でしれるなどゝ唄れ、心くるしく、うらの毛小屋〔に〕一人日なたぼこして」、中七以下「遊ぶ親のない雀八・時」。おらが春、前文「親のない子はどこでも知れる、爪を咥へて門に立と子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木・萱など積たる片陰に跼りて、長の日をくらしぬ。我身ながらも哀也けり」、中七以下「遊べや親のない雀六才弥太郎」。発句鈔追加、「門に立」を「門に立つ」とするほかは、文・句ともおらが春に同じ。ただし、「六才弥太郎」を省く。

○雀子やお竹如来の流しもと

㊥　七番日記（文化14・2）・文路あて書簡（文化14・3・15付）

㊟　七番日記、座五「流し元」。書簡、前書「心光院にて」、座五「流し元」。

○慈悲すれば糞をするなり雀の子

㊥　文政句帳（7・4）・浅黄空・自筆句集

㊟　文政句帳・浅黄空・自筆句集・文政版発句集、中七「糞をする也」。

○雉子なくやきのふ焼れし千代の松

㊥　文化句帳（4・3）

㊟　前書「小金原」。

雉子なくや見かけた山のあるやうに

㊥　七番日記（文化9・3）・株番・稿本発句題叢・発句鈔追加

㊟　題叢、上五「雉鳴や」。発句鈔追加、上五「雉子啼や」。希杖本句集、「雉子鳴や見置た山の有やうに」。

○夕雉子のはしり留りや鳰の海

㊀　七番日記（文化11・春）・句稿消息
㊟　七番日記・句稿消息とも、上五「蒲公〔英〕の」。
門番が明てやりけりねこの恋
㊀　八番日記（文政3・2）
㊟　座五「猫の恋」。
おどされて引返すなりうかれ猫
㊀　八番日記（文政3・2）
㊟　風間本、中七「引返す也」。梅塵本、「引返しけり」。
○うかれ猫奇妙に焦て戻りけり
㊀　浅黄空・自筆句集・某あて書簡（推定文化14・3）
㊟　浅黄空、中七以下「奇妙ニ焦てもどり〔けり〕」。自筆句集、中七以下「き妙に焦てもどりけり」。書簡・文政版発句集、座五「もどりけり」。七番日記（文化13・3）・句稿消息、座五「参りけり」。
恋猫のぬからぬかほで戻りけり
㊀　文政句帳（7・10、8・3）
㊟　文政句帳（5・閏1）、中七以下、「鳴かぬ顔してもどりけり」。
うかれ猫どのつらさげて又来たぞ
㊀　七番日記（文化13・1）・句稿消息・浅黄空・自筆句集
㊟　七番日記、上五・中七「うかれ〔猫〕どの面さげて」。句稿消息（重出）・浅黄空・自筆句集、上五・中七「うかれ猫どの面さげて」。
行がけの駄賃になくや小田の雁
㊀　板本発句題叢
㊟　七番日記（文化9・1）、中七以下「駄ちんになくや天つ雁」。株番、中七以下「駄ちんに鳴やけさの雁」。
彼岸とて袖に這する虱かな
㊀　八番日記（文政3・1）
板　橋
○かしましや江戸見た雁の帰り様
㊀　七番日記（文化10・2）・志多良・句稿消息・稿本発句題叢・浅黄空・自筆句集
㊟　句稿消息・自筆句集とも、前書ナシ。
寝た跡の尻も結ばず帰る雁
㊀　八番日記（文政2・11）
㊟　風間本、中七「尻〔も〕結ばず」。梅塵本、中七以下「尻も結ばず帰雁」。
閏二月二十九日といふ、雨も漸おこたりぬれば、朝とく頭陀袋首にかけて、足つひで例の角田堤にかゝる。東はほの〴〵としらみたれど、小藪小家はいまだくらかりき。しかるに上のならせ給ふにや、川の面に天地丸赤〳〵とうかみて、田中は新に道を作り、みぞ堀はこと〴〵く板をわたして、おの〳〵御遊を待と見えたり、誠に無心の草木にいたる迄、春風に伏しつゝめで度御代をあふぐとは覚え侍。
○五百崎や御舟をがんで帰る雁
㊀　七番日記（文化8・閏2）
㊟　閏二月の条、「五十崎や御舟拝んでかえる雁」、「至十九句」とした後、「花さくや桜所の俗坊主」の一句を書き入れ、更に「閏二月廿九日といふに、雨も漸をこたりなれば、朝とく〔頭〕陀袋首にかけて」まで記して墨抹。正月の条末に以下のように収める。「閏二月廿九日といふ日、雨漸をこたりなれば、朝とく〔頭〕陀袋首にかけて、足ついで角田川堤にかゝる。すでに東はほの〴〵しらみたれど、小藪小家はいまだ闇かりき。しかるに近〴〵ならせ給ふにや、川の方幽

〔研究ノート〕

嘉永版『俳諧一茶発句集』入集の句(二)

黄色瑞華

凡例

一　一行めに、嘉永版『俳諧一茶発句集』の本文をおく。ただし、漢字はおおむね現行文字とした。また、「もとの集」(文政版『一茶発句集』)にあるものは、句頭に○印を付した。

二　二行め以下に、㊥として、初出及び他書に所収の有無を書名等によって記した。

三　句形等に嘉永版発句集と異るものがある場合、㊟以下にそれを示した。

四　嘉永版発句集の他は、主として一茶全集本により、必要に応じて一茶叢書本その他によった。例えば、『浅黄空』(叢書本)、『希杖本発句集』(荻原井泉水校訂『一茶遺稿・志多良』岩波書店)、『一茶発句鈔追加』(栗生純夫著『一茶新孝』西沢書店)などがそれである。

俳諧一茶発句集

春の部(承前)

二月十五日雪降けるに

○花のところへ雪のふる涅槃哉

㊥　文政句帳(文政6・2)

㊟　文政句帳、前書ナシ。上五・中七「花の所へ雪が降る」。文政版発句集、前書「二月十五日雪ふりけるに」。

御ねはんやとりわけ花の十五日

㊥　八番日記(文政2・2)

㊟　上五・中七「御涅槃やとり分花の」。

小うるさい花が咲とて寝釈迦哉

㊥　おらが春

㊟　前書「二月十五日」。座五「寝釈迦かな」。発句鈔追加、上五・中七「眼の毒の花が咲くとて」(左注に一書ニ小うるさいト上之字アリ)。

寝ておはしても仏ぞよ花の降る

㊥　八番日記(文政2・2)

㊟　「寝ておわ(は)しても」「花が降る」。

○寝て起て大欠して猫の恋

㊥　七番日記(文化14・2)・自筆句集・浅黄空

㊟　自筆句集・浅黄空、中七「大欠びして」。七番日記(文政1・3)、座五「桜哉」。

○蒲公英の天窓はりつゝ猫の恋